

風俗週刊

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第107号 令和元年(2019)9月1日

資料見聞

夢窓疎石像

自賛(滴水宜牧写)

河田小龍筆 吸江寺蔵

鎌倉時代から室町時代初期にかけて活躍した臨済宗の高僧、夢窓疎石(1275~1351年)の頂相です。頂相とは、禅僧の肖像画や肖像彫刻のことです。

臨済宗では、師から弟子へと法が伝わった証として、師の袈裟や墨蹟などが相伝されました。頂相もその一つでしたが、禅僧が亡くなった場合や遠忌などの際に制作されることもありました。

夢窓疎石は、伊勢(現三重県)に生まれ、後醍醐天皇や足利尊氏ら時の権力者から崇敬され、京都の天龍寺、相国寺などの開山として知られています。一方で、優れた作庭師としても知られており、今日まで続く日本文化の礎を築いた人物でもあります。夢窓の弟子には、土佐出身で「五山文学の双璧」と称される義堂周信、絶海中津ら高

僧が名を連ね、彼ら夢窓派は室町時代を通じて幕府や天皇家と臨済宗寺院をつなぐ役割を果たし、隆盛しました。

しかし、夢窓自身は遁世傾向があったようで、文保2年(1318)には土佐に下っています。土佐に入った経路は明らかではありませんが、梶原町には夢窓疎石筆と伝わる文字が彫られた木板が残されています。

夢窓は、浦戸湾にひらけた豊かな地を選び、中国の西江に見立てて吸江と名付け草庵を結びました。この草庵こそが、今日、高知市五台山の麓で法灯を守り続けている吸江寺の前身となる吸江庵なのです。

本画像は、頂相の通例に従って曲泉に座し、右手に竹篋をもつ夢窓疎石が描かれています。穏やかな表情をたたえ、袈裟も決して華美でない落ち着い

た色で描かれており、質実剛健な禅の精神を体現していたであろう夢窓の気品高さを感じさせます。

作者の河田小龍は、幕末から明治の土佐で活躍した絵師です。落款印から明治31年(1898)、小龍75歳の作とわかります。小龍は同年12月に亡くなったので、最晩年の作品といえるでしょう。

本作にみられる極端な肩は、天龍寺などに残る南北朝時代の夢窓の頂相と共通しています。さらに興味深いのは、右耳の前あたりから伸びる複数の毛が描かれていることです。これは、京都の東福寺の開山である円爾が宋から請来した「無準師範像」(国宝、東福寺蔵)や「夢窓疎石像」(京都、妙智院蔵)に共通する表現であり、また夢窓の弟子である春屋妙葩を描く際の特徴でもあることが指摘されています。晩年の小龍が本画像の制作にあたって臨済宗祖師の頂相を熱心に学んだことを想像させます。

蛇足ですが、僧侶による法話を聴くテレビ番組を何気なく拝見していると、耳の孔から毛が生えている方をみつけることが時々あります。人々の悩みに耳を傾け続け修行されていると、今も昔も耳の孔から毛が生えてくるものなのかと、この頂相を拝見するたびに考えてしまいます。

(那須望)



企画展 開創700年記念 吸江寺

会期：令和元年10月4日(金) から12月1日(日) まで 会期中無休

※会期中、一部展示替えを行います。(前期 10/4~11/1、後期 11/2~12/1)

吸江寺は、臨済宗の黄金期を築いた夢窓疎石によって文保2年(1318)に吸江庵として結ばれました。その後、夢窓の後継いだ高弟の義堂周信、絶海中津、土佐守護であった細川氏、そして長宗我部氏、土佐藩初代藩主山内一豊の養子・湘南、少林踏雲など、様々な人たちとのつながりの中で歴史を紡いできました。

本展では、当寺に残るご宝物や、土佐と関係が深い京都・龍興寺所蔵の貴重な文化財をご紹介します。土佐の歴史と吸江寺の関わりを併せてご覧いただきたいと思います。

■夢窓疎石、五台山に吸江庵を開く

高知県中央部に位置する土佐湾の支湾の一つに浦戸湾があります。この浦戸湾の北東岸に、標高138mの5つの峰からなる五台山があります。五台山は、かつては大島とも呼ばれ、四方を海に囲まれた湾内の島でした。浦戸湾の隆起と干拓で現在のような独立した山となったと考えられています。

五台山の地名は、13世紀中頃の史料にみえており、中国の五台山に似ていることから名付けられたと伝えられています。この五台山には、四国八十八ヶ所霊場第31番札所五台山竹林寺がありますが、元は天台宗系の寺であったと考えられ、発掘調査で古代まで溯る寺院であった可能性が指摘されています。

この五台山の西麓に営まれたのが、吸江庵、後の吸江寺です。吸江庵は、『天龍開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜』には文保2年(1318)、臨済宗の僧、夢窓疎石が鎌倉幕府執権北条高時の母覚海尼の招きを避け、土佐に下り草庵を当地に営んだことに始まるとされています。浦戸湾を望む景勝地である吸江の地名は、中国唐の僧馬祖の語に「一口に吸尽す西江の水」とあることから名付けたといわれています。江戸時代には、岩井玉洲が『吸江志』を著し、橋本小霞や河田小龍が吸江の勝景を



浦戸湾風景絵巻(一部) 高知県立高知城歴史博物館蔵

描いています。幕末に土佐を訪れたイギリスの外交官アーネスト・サトウは、当時の浦戸の風景について書き残していますが、当時の風景は明治以降徐々に失われていきます。

吸江庵は、津や湊など交通の要所を選定し営まれたと考えられます。

■吸江庵の様相

吸江庵には当初、草庵のような建物があつたと考えられます。室町時代には、庵とは呼称されていますが、ある程度の伽藍を整えていたことが想定されます。

吸江寺には、門戸や室内に掲げる扁額が3面残っています。1面は、4代將軍足利義持筆とされる「吸江菴」と横書き陰刻されたもので、左端に「頭山(花押)」と刻されています。義持は応永30年(1423)に出家し法号を「勝定院頭山道詮」と称しており、吸江庵が相国寺の塔頭・勝定院の末寺であつたので、先のように記したと思われる、この扁額は出家以後のものと考えられています。もう1面は、夢窓疎石の筆とされる「西来堂」と陰刻された扁額です。『南路志』によるともう1面「西来」と書かれたものがあつたようです。この扁額には墨書がありますが、判断できない部分があります。もう1面は絶海中津が書いたとされる「磨甑」と横書きされた扁額です。絶

海は、吸江庵が相国寺の塔頭・勝定院の末寺になることを願っており、応永4年（1397）に許可されています。この扁額は、磨甃堂に懸けられていた扁額と考えられます。

吸江寺の扁額は当時の伽藍の一部を知ることのできる物資料として貴重です。

■五山文学と衣法を嗣ぐ義堂・絶海

五山文学とは、鎌倉時代末期から室町時代にかけて、五山禅僧により創作、鑑賞された漢詩文で、中世文化形成に影響を与えました。

禅林文芸は、来朝僧や留学僧により伝えられ、正安元年（1299）に来朝した一山一寧は、禅学や儒学などにも通じ、その門下には夢窓疎石などがあります。土佐出身の義堂周信は、夢窓より法を嗣いで、鎌倉で夢窓派門下の指導者となっています。同じ土佐出身の絶海中津は、四六文の模範とされた作法を伝え、五山間に流行しました。二人は、五山文学の双壁といわれ、明国までその名が知られていました。

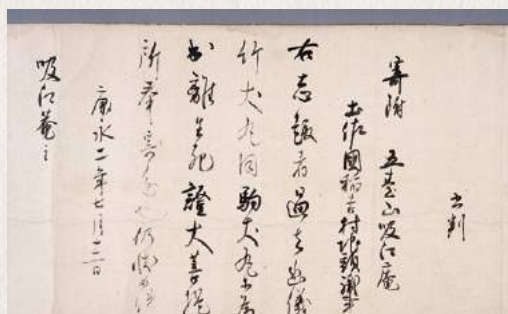
吸江寺には、夢窓疎石から法嗣の絶海中津に相伝されたとされる伝法衣（伝衣とも）が残っています。伝衣とは、本師から嗣法の弟子へ袈裟を授ける風習で、禅宗では広範囲の師を対象としています。この袈裟には、伝法の証という継承者にとって重大な意味が付与されていますが、これは禅宗のみにみられます。

吸江寺の袈裟は、九条袈裟と呼ばれ南北朝時代のもので、弘子（14世紀カ）や中啓（江戸時代カ）などと同じ箱に収められていました。明治時代初期の廃仏毀釈のため吸江寺が廃寺になった際に寺外へ持ち出され、少林踏雲らにより買い戻されたという歴史のある作品です。

■吸江庵と権力者

夢窓疎石は2年で関東に去ることになりますが、夢窓の後、義堂周信と絶海中津などの高僧が衣鉢をつぎ、吸江庵は南海の名刹として、五山文学史上でも有名になりました。

吸江庵には開創以来、南北朝から室町・戦国時代にわたる中世の様子を知ることのできる貴重な文書史料、吸江寺文書（49通・2巻）が残っています。吸江庵は、文和2年（1353）前に、五台山より独立して四至が定ま



吸江寺文書 吸江寺蔵 某寄進状写本

り、康永から応永年間（1342～1428）に稲吉名（南国市）、介良庄、吾川山庄、片山庄の一部が寄進され所領が拡大していきました。さらに京都相国寺の塔頭・勝定院末寺となりました。室町時代には、細川氏が守護となり、香美郡田村庄（南国市）一族が在城することとなり、保護を受けました。細川氏の被官として、吸江庵の寺奉行を勤めていたのが長宗我部氏でした。

吸江庵には、多くの禅僧が居住することとなり、「吸江庵法式」へ応永13年（1406）、「吸江庵条々事」へ寛正4年（1463）などの規定を作り、長宗我部文兼が「祠堂条々禁法之事」を定め、祠堂銭（寺の修理などに使用する金品を貸して利子をとる金融資金）運営をする特権を得て繁栄していたとされています。しかし、室町幕府が弱体化し、地頭が台頭してくると有力戦国大名である長宗我部氏の庇護を受けることになりました。

天正16年（1588）の『長宗我部地検帳』の長岡郡五台山之島地検帳には、地藏堂・御影堂・粹適庵・鎮守・客殿・庫司・衆寮・風呂・待月・祀堂蔵などの他、計15の建物がみえています。これらは、中世末の吸江庵の伽藍の様相を伝えてはいますが、中世末には一時退転したとされています。

■山内家、禅と縁を結ぶ

慶長6年（1601）、山内一豊は掛川から土佐に移封となり、浦戸城に入ります。一豊は、天正13年（1585）頃から美濃国の瑞龍寺、南化玄興に参禅していたと言われ、禅宗に帰依していたとされています。南化玄興は、後に京都の妙心寺大通院の開山となった禅僧で、一豊夫妻は養子「捨」を慶長元年に妙心寺の南化玄興のもとへ弟子として出家させたとされています。捨は、出家し道号を「湘南」と称しました。湘南宗化は、一豊の入封にともない土佐に下り、吸江庵に入り荒廃していた庵を再興し、寺名を吸江寺と改めています。その後、湘南は、大通院の二世となり、以後大通院と吸江寺の住職は、二寺を兼務することになります。しかし、明治時代を迎えると時代の大きなうねりの中に吸江寺も巻き込まれていきます。



湘南宗化像（一部）吸江寺蔵

この吸江寺で修業した人物に絶蔵主すという若き青年がいますが、彼が後の山崎闇斎で、禅僧から儒家となった人です。

■貞和五年、石茶臼吸江庵に施入される

日本の喫茶文化は、中国からもたらされました。平安時代初めに唐風の喫茶文化が伝来し、12世紀前半には、博多津の唐房（チャイナタウン）に宋風の点茶（抹茶）法が伝来した可能性が指摘されています。12世紀末に、榮西が製茶法と飲用法を日本に伝えたと考えられています。鎌倉時代後期以降には、禅宗寺院にも喫茶文化が広まっています。夢窓疎石も、点茶法による飲茶をたしなんでいたことが法話集『夢中間答』にみえています。

さて、吸江寺には南北朝時代の貞和5年（北朝年号・1349）銘の石茶臼が残っています。この石茶臼には、銘文が刻されており、上臼の側面には五行にわたり、「施入於／土左国五基山／吸江菴白也／貞和五年丑／十一月廿五回、下臼皿部の外側には横書きで「五基山」とあります。白は、下臼を作り出した皿部と上臼の二石から成り、砂岩製です。白には黒漆が残存しており、かつて黒漆が塗られていたことがわかります。なお、観応2年（1351）作の『慕婦絵詞』には、僧の居間に置かれた漆塗りの茶臼が描かれています。この石茶臼に残っている漆も当初のもの可能性があります。また、一休宗純の著『骸骨』には、「なきあとの／かたみに石がなるならば／五輪の台に

／ちやうすきれかし」とあり、一休の風刺がこめられています。当時、石茶臼は貴重な品で、寺院や有力武士層が所有していたと考えられます。

なお、『長宗我部地検帳』の介良庄地検帳には「本吸江茶園所」とみえており、かつて茶の栽培が行われていたと思われる。

禅宗寺院では、修行僧である雲水の時に茶に関わる作務があり、茶は修行の一部として捉えられています。吸江寺の石茶臼もそのような背景があったことが考えられます。この石茶臼は、他の宝物と共に廃仏毀釈時に流出したと考えられ、一時期、高



石茶臼
(高知県指定文化財、吸江寺蔵)

知市江ノ口の寺田寅彦邸に移りました。が、没後に遺族より吸江寺に納められたことは幸いなことでした。

■神仏分離と吸江寺の復興

明治政府は、王政復古の大号令に伴い祭政一致の理想のため、明治元年（1968）に神仏判然令（神仏分離令）を公布しました。政府には、仏教排斥の意図はなかったものの、神道優位とする気運が高まることとなり、仏教弾圧の形として現れた廃仏毀釈が行

われました。この運動の激しかった地域には、土佐・薩摩・讃岐の多度津などがありません。土佐では、堂宇の取り壊しや寺地、仏像、仏具等の売却や焼却も行われたとされています。僧侶の中には、還俗した者や神官になった者もいます。当然、吸江寺も他の寺院同様に廃寺となりました。明治13年（1880）京都の本山妙心寺より特命を受けた32歳の少林踏雲が来高し、



少林踏雲像（部分）
吸江寺蔵

幡多郡黒潮町の長泉寺や吾川郡仁淀川町の養花院、高岡郡津野町の聖音寺等、県内の16箇寺の寺院を再興し、檀家のほとんどいかなかった吸江寺も明治25年に再興を果たしました。踏雲は、疲弊した土佐臨済宗の復興のため奔走し、手書きの貴重な妙心寺派寺院明細帳も残しています。それは、二冊の『明治四十二年調成 本派新旧各寺明細帳 臨済宗妙心寺派 土佐部教務所』と『明治四十二年 各寺受持佛堂各廢寺 各明細帳 土佐部教務所』で、踏雲の自著によるものです。これらは、臨済宗

のみならず、当時の廃仏毀釈の実態を伝える貴重な資料となっています。踏雲は、散逸していたと考えられる九条袈裟など貴重な宝物を買い取り、新しい仏具等を製作し、後継者の養成にも尽力しています。土佐国は廃寺になった寺院数が多くあります。明治初年、妙心寺派の寺院数は、125箇寺あったとされ、その内5箇寺が残り、維新後20箇寺が再興されました。まさに少林踏雲が、土佐坊と呼ばれたのも、このような所以があるからです。

吸江寺は、昭和28年（1953）1月29日に吸江庵趾として高知県の史跡となっています。坂を登った吸江寺の入口には史蹟の碑が建っています。階段と石垣が残っており、境内に至ると本堂と庫裡があります。昭和62年（1987）にこの本堂と庫裡の改築に伴う発掘調査が行われ、その範囲は限定されたものでしたが、近世の吸江寺に関係する基壇状遺構や溝状遺構が確認されました。残念ながら中世に関わる遺構は確認されませんでした。しかしながら、史料や仏像・仏画など、そして踏雲の残した各寺明細帳が吸江寺の法灯の展開を物語ってくれています。重要文化財の地藏菩薩坐像は現在、本堂裏に昭和57年に造立されたパゴタの塔内に安置されています。

（岡本・西山）

企画展「遠流の地 土佐」から 法然ほうねんは土佐とさに流されたのか

石畑 匡基

古来、佐渡や隠岐などの離島と同じ「遠流」の地に定められていた土佐。今回の企画展では、その土佐に流されたり、落ち延びた人物を紹介します。小稿では、展示内容の中から、浄土宗の開祖として知られる法然に関して紹介したいと思います。

法然は、長承2年（1133）に美作国（現岡山県）で生まれました。9歳で出家し、比叡山（現滋賀県・京都府）で修行しました。そして承安5年（1175）には、ひたすら「南無阿彌陀仏」という念仏を唱える「専修念仏」で浄土に往生できると説く「浄土宗」を開きました。浄土宗はまたたき間に広がり、九条兼実くじょうかねみねといった公家だけでなく、武家からの信仰も集めました。

ところが、浄土宗が流行することを好ましく思わない比叡山をはじめとした旧仏教勢力からの迫害を受けるようになりまし。さらに、建永2年（1207）には専修念仏が禁止され、75歳という高齢にもかかわらず、法然は配流されることになりました。

実は、その配流先には諸説あります。法然の事跡を絵とともに紹介する『法

然上人行状絵巻』には、法然を土佐国へ配流とするので、護送するよう土佐国司に命じた命令書の写しが載っています。したがって、土佐へ流されることになったのは確実でしょう。さらに、配所は幡多はたであったと記す資料も残っています。

しかしながら、土佐までは行かず讃岐国（現香川県）で流人生活を送ったという讃岐配流説や、一応土佐まで来て、その後に讃岐に移ったという土佐滞留説があります。

土佐滞留説では配流の地である幡多郡中村に赴くため、讃岐から阿波あわ（現徳島県）沖を通って、甲浦かほり（現東洋町）に上陸しましたが、ここで配所が土佐から讃岐へと変更されたため、しばらく滞在したのちに讃岐へ移ったとされています。法然の滞在が機縁となり、甲浦には超願寺が、野根（現東洋町）には観音寺が開基されたと伝わります。さらに、当初配所とされていた幡多郡中村（現四万十市）では、地元の人々が法然のために庵いほを設けて、その下向を待ちわびていたそうです。しかし、讃岐に配流先が変更されたので、法然が所持する鉦鼓と袈裟けさをもらい受



写真1 法然上人ゆかりの袈裟（四万十市郷土博物館蔵）

けて、中村に一寺を建立し、正福寺と名付けたといわれています。寺で用いられていたと伝わる袈裟が現在四万十市郷土博物館に収蔵されています（写真1）。ところで、四万十市郷土博物館には、安政5年（1858）に作成された「当山新古什物帖」という資料が収蔵されています。これは、正福寺の建造物や寺宝を書き上げたリストで、明治期に一時廃寺となった正福寺の様相を知ることが出来る貴重な資料です。それによると、「当山靈玉」として、「元祖大師御真筆名号」と「同伝来九条御袈裟」、そして、「七枚鉦鼓」があったと記されています。元祖大師とは法然を指します。したがって、江戸時代に

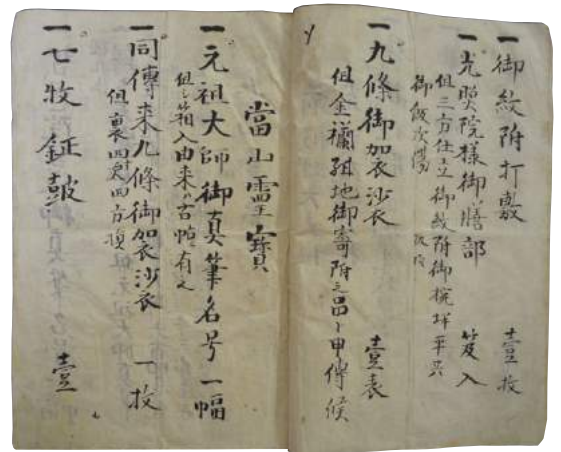


写真2 当山新古什物帖（四万十市郷土博物館蔵）

法然ゆかりの袈裟があったことは確かでしょう。しかしながら、什物帖では、袈裟の裏地には「四寸（約12cm）四方」の「損」があると記されていますが、写真1の袈裟には破損している箇所は確認できません。さらに形状も袈裟とは言い難いでしょう。

恐らくですが、四万十市郷土博物館に収蔵される袈裟は、正福寺に収蔵されていたことは間違いないかもしないのですが、その由来については混乱が生じている可能性が高いといえます。しかしながら、法然が来るはずであったという伝承が語り続けられてきたのは事実です。このような伝承が残されていることが、「遠流の地」であった土佐の特性の一つともいえるでしょう。

写真と言葉で伝える私たちのふるさと 第17回 民家の甲子園 高知大会



写真提供：民家の甲子園高知県事務局

高校野球の全国大会、通称「甲子園」にならない、甲子園の名がついた高校生
の大会が全国各地で開かれています。
ラグビーやバスケットボールといっ
たスポーツの甲子園のほか、「神楽甲
子園」や「黒板アート甲子園」など文
化系も充実しています。なかには「グ
ルメ甲子園」や「スイーツ甲子園」な
ど、おいしそうな甲子園もみられます。
高知県では、平成4年（1992）
から全国高等学校漫画選手権大会「ま
んが甲子園」が開かれています。

今回ご紹介する「民家の甲子園 全
国高等学校対抗民家町並みフォトコン
テスト」は、高校生が地域の文化・民
家・町並み・自然等を撮影して、その
魅力をプレゼンテーションして競い合
うものです。大会テーマが毎年設定さ
れ、第17回の今年は「響」でした。
高知大会は6月15日に開催され、5
校7チームが参加しました。主催は一
般社団法人高知県古民家再生協会で、
当館は共催し、会場を提供しています。
今回は、1位（高知県知事賞）に高
知県立小津高等学校Aチームが輝きま
した。同チームは、「私たちの心に響
くもの。それは通学路にある駄菓子屋
のおじちゃんとおばちゃんの声」と、
昭和27年（1952）から続く駄菓子
屋「十田屋」をストーリー性にあふれ
た写真で紹介。ネットを通じて対面せ
ずに物が買える現代社会にも人の心に
響く「温かい言葉」や「優しい笑顔」
を大切に、AIとの共存が予測される
未来にも感情や感性を心に響かせよう
と、メッセージを発信しました。
高知大会の上位受賞者は、8月11日
に福島県郡山市で開催された全国大会
に進出しました。
（中村）

「土佐・木の民具ものがたり」展終了

企画展「土佐・木の民具ものがたり」が6月30日（日）に終了しました。展
示や関連企画を通して木の利用の多様性と面白さに改めて気づかされました。



ヒノキのお風呂で
「はあ〜、極楽極楽！」

土佐の大工の技を実演



礎石の凹凸にあわせて柱の底面を削り、立てる



ハツリで木材の側面を落とし、
角材にする。失われ行く杢の技



人気の一本下駄作り。
バランスをとるのはむずかしい？



ヒノキ笠を編む機織り。布を
織る機織りを改造する知恵
に脱帽（宮本明美氏蔵）

ワークショップで もろぶたを作る



完成したミニもろぶた
なかなかカワイイ！



刻屋さんによるワークショップ
「ミニもろぶたを組み立てよう！」

れきみん！サマーミュージアム

「プレイバック昭和と「なつのごとせ」」

開催日：令和元年7月26日(金)、8月4日(日)、12日(月・祝)、24日(土)

今年の夏休み企画は、プレイバック昭和と「なつのごとせ」と題して、なつかしい体験メニューをいろいろ盛りこみました。

なつかし企画、まずはボンネットバスで昭和なプチ旅に。「れきみん号」にて約20分の岡豊山ぐるっと一周の旅にご案内しました。車掌役のスタッフが整理券にパチリと切符にハサミをいれ、みなさん乗車。このバスが右折・左折のときに出す方向指示器がとてかわいらしい！オレンジ色のツノのようなものが跳ねあがるのです！指示器がでるたびに注目の的になっていました。ボンネットバスは山道も得意。エンジン音も快調に運行しました。

普段、車での来館では見逃しがちな民家（旧味元家住宅主屋）では、蚊帳に入った石臼で大豆をひいてみたりと昔のくらし体験をしました。炒り大豆の香ばしい香りに思わず味見してしまう子も。登録有形文化財で釘などは打てないため、長押の隙間に桜の木でつくったコミセンを差し込んで蚊帳を吊りました。蚊帳の中は思ったより広く、そのまま「昼寝体験」もしたくなりました。



アナログレコード盤で聴く「流行歌をレコードで聴こう」では、事前に会議室で企画展の内容にもあわせた曲選び。廊下を通ると懐かしいメロディーが流れ、振り付けやその曲がヒットしていた小学生時代を思い出しました。小学生といえば、20年くらい前まで高知県の小学生に配られていた夏休みの宿題冊子が「夏の子ども」。

令和の時代にも子どもたちの宿題の手助けと楽しい体験ができる歴史です。また次回、トおいでよ！れきみん！

(総務事業課)

第14回岡豊山フォトコンテスト 今回もオリジナルカレンダー、つくりまします！

岡豊山、歴史館に来られたことはありませんか？お目当てはサクラ？鉄砲隊？企画展？山城ファンには遺構が残る岡豊城跡も人気です（毎週日曜10時から無料ガイドあり）。

でも岡豊山の魅力はまだまだあるはず！フォトコンテスト&カレンダーで、それをお伝えしたいのです！テーマは「岡豊山の春夏秋冬」ぜひ素敵な岡豊山の自然や思い出の写真を応募ください。

締切 令和元年10月14日(月・祝) 17時

詳しい応募方法などは当館HPで

作品展示 令和元年11月28日(木) 17時

令和2年1月19日(日)

「みんなのお気に入り賞」への投票もよろしくお願いします。

(総務事業課)



「秋の彩り」武田勝彦

つくりまします！

中学生の職場体験学習 博物館の仕事にチャレンジ

今年度も4月以降、地元南国市の他、高知市内の中学生が当館で職場体験学習を行いました。学芸員だけでなく学芸補助員、展示解説員など様々な職員と関わってもらう中で、博物館の仕事や役割などを知ってもらい、働くことの意義を覚えてもらうようプログラムしています。



協力して甲冑の着付けもしました。



細かい作業も粘り強くやり遂げました。

生徒たちからは「いろいろな役割の人がいて博物館がなりたっていることが知れてよかった」「受付の人は、解説などの仕事もしていて驚いた」と新たな発見の声が聞かれました。また、最終日には、生徒たちが自ら考え行動する活動として館内の展示室の中からテーマ(資料)を一つ選んで解説を行いました。新鮮な眼で捉え、考えた解説は、私たちも参考になるものでした。今後も一人一人のキャリア発達を支援していきたいですね。(西山)

第12回
四国地域史研究連絡協議会 高知大会
高知県立歴史民俗資料館シンポジウム

12月1日(日) 10:00～ 当館多目的ホールにて
 「豊臣政権下の四国」をテーマに、九州大学教授中野等氏による基調講演のほか、各研究者による発表などのプログラム。一般のご参加大歓迎です。

国史跡・岡豊城跡めぐり

当館が立地する長宗我部氏の居城跡・岡豊城跡を案内人のガイド付きで散策。
 毎週日曜日(12/29を除く) 10時出発
 Aコース 約30～40分 / Bコース 約60分
 事前予約不要、資料館観覧券要
 ※雨天・荒天時は中止。

「ポスター貼ります隊」大募集!

当館主催の企画展(年間4回程度)等のポスター掲示に協力していただける方を随時募集しています。詳しくは当館HPに掲載しています。お問い合わせは当館学芸課(電話088-862-2211)まで。

学校団体等のご利用について

高校生以下は**無料**です。引率の先生方は利用届のご提出により**観覧料が免除**されます。
 展示見学に加えて、映像の視聴、展示室を回りながら答えるクイズプリントもご用意できます。
 勾玉作り・火おこし・甲冑体験・民家体験などの体験学習をご希望の場合は、事前に当館学芸課へご相談ください。(電話088-862-2211)

岡豊風日(おこうふうじつ) 第107号
 令和元年9月1日
 編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
 〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1
 TEL 088(862)2211
 FAX 088(862)2110

開館時間 午前9時～午後5時
 休館日 年末年始12月27日～1月1日
 臨時休館あり

観覧料
 (通常展)大人(18才以上) 460円
 団体(20名以上) 360円
 (企画展)吸江寺・通常展 700円
 10月1日より金額変更予定
 団体(20名以上) 560円

無料…高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者(その介護者1名)

印刷・川北印刷株式会社

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/>
 Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

企画展 **開創700年記念 吸江寺**

10月4日(金)～12月1日(日) 会期中無休

昨年、夢窓疎石による開創から700年を迎えた高知市の吸江寺。大切に守り伝えられてきた数々の寺宝を寺の歴史とともに紹介します。



●講演会
 「吸江寺について」
 10月5日(土) 14:00～16:00
 講師: 吸江寺住職 小林玄徹氏
 要予約、先着130名

●講座
 「吸江寺と禅僧の文芸」
 11月3日(日) 14:00～16:00
 講師: 神戸学院大学准教授 中村健史氏
 要予約、先着130名

●ワクワクワーク
 「実は茶所!?土佐茶の魅力再発見」
 11月10日(日) ①10:30～12:00 ②13:30～15:00
 講師: 吉岡郷継氏・(株)ピバ沢渡 岸本憲明氏、要予約、先着各15名

●ミュージアムトーク
 10月13日(日)・10月27日(日)・11月23日(土祝) 各14:00～14:30
 講師: 本展担当者 予約不要
 以上、全て観覧券要

旧雲所軒襖絵屏風
 塩川文麟筆 二曲一双(右隻)
 京都府 龍興寺蔵


第8回 旧大栃高校民俗資料一般公開

11月16日(土) 17日(日) 10:00～16:00 入場無料
 香美市物部町の旧大栃高校に保管している当館所蔵の民俗資料約2千点を公開します。

コーナー展 **ねえと千支の玩具子**

予告
 令和元年 12月13日(金)～1月26日(日)
 令和2年


郷土玩具収集家・山崎茂氏のコレクションから千支にちなんで全国のねずみ玩具を展示します。
 今戸土人形(東京)



企画展 **遠流の地 土佐**

予告
 令和2年1月10日(金)～3月8日(日)

古来より最も重い流刑地のひとつとして知られる土佐。土御門上皇や毛利勝永など、土佐に流されたり、落ち延びたとされる人々にまつわる資料を紹介し、「遠流の地 土佐」の実情に迫ります。



豊臣秀吉朱印状 毛利勝永(吉政)宛
 安芸市立歴史民俗資料館蔵